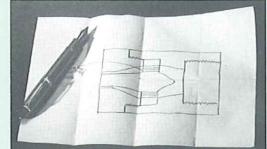


●認定化学遺産 第015号

日本初期の塩化ビニル樹脂成形加工品



記念写真 1951年9月13日
(アロン化成(株)蔵)



E.G.フィッシャー手描きの塩化
ビニル押し出しダイス図面
(アロン化成(株)蔵)



国産初期の硬質塩化ビニルパイ
プ (アロン化成(株)蔵)



塩化ビニル被覆電線見本(古河電気工業(株)蔵)

塩化ビニル樹脂加工品は今日、重要な熱可塑性合成樹脂製品の一つである。硬質塩化ビニル管及び軟質塩化ビニル被覆電線は戦後の早い時期に日本にも登場し、国民生活を大きく変化させた。硬質塩化ビニルは成形加工が難しいが、東亜合成化学工業(株)は1951年、イギリスのウインザー社の押出機を改良して塩化ビニル管の試作に成功し、水道管などに広く使われた。本化学遺産は当時の製品見本として、現在アロン化成(株)に保管されている。この工業的生産はイギリスよりも早く、技術史的に重要である。一方、軟質塩化ビニルの電線被覆は1949年に古河電気工業(株)がアメリカの押出機を用いて国産化を実現した。資料は営業用の見本で、現在広く普及している塩化ビニル被覆電線の初期のものとして貴重である。

●認定化学遺産 第017号

日本のセメント産業の発祥を示す資料



フレットミル(手前)とコンクリートブロック
(奥)
(アサノコンクリート(株)蔵)

1875年隅田川東岸で、日本で初めてセメントを製造した官営工場は、浅野総一郎に払い下げられ、後の日本セメント(株)となった。現在は清澄公園(東京都江東区)に隣接するアサノコンクリート(株)深川工場敷地の一隅に「本邦セメント発祥の地」碑と共に、明治時代に使用されたセメント粉碎用フレットミルなどが展示され

●認定化学遺産 第016号

日本のビニロン工業の発祥を示す資料



羊毛様合成一号製造工場計画書
(1942年9月30日)

(京都大学蔵)



ビニロン紡糸実験装置
(京都大学蔵)



ビニロン・トウ(1950年12月19日製造)
(クラレ(株)蔵)

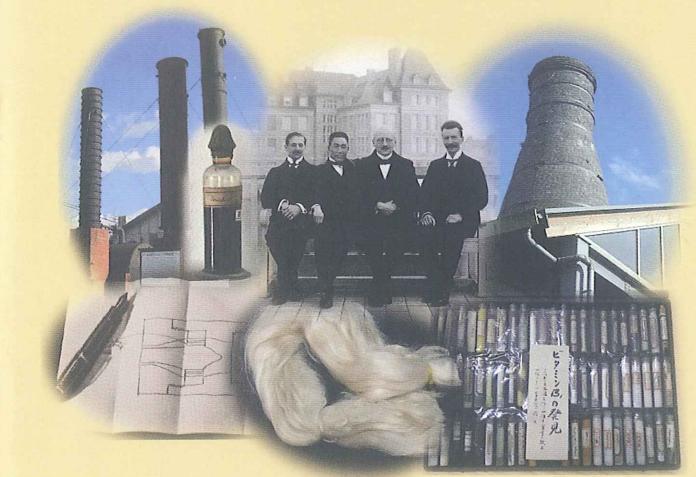
ている。一方、最初の民営セメント製造会社(後の小野田セメント(株))が1881年山口県小野田に誕生した。創業時に築造されたセメント焼成用徳利窯(とっくりがま)が保存されており、わが国セメント産業草創期の姿を今に伝える貴重な産業遺産となっている。明治の初期、日本のセメント産業草創期に東京と山口に誕生した二つのセメント会社は、現在は合併して太平洋セメント(株)となっている。



旧小野田セメント徳利窯
(太平洋マテリアル(株)蔵)



化学遺産認定 第3回

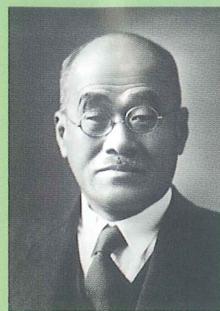


公益社団法人日本化学会は、化学と化学技術に関する貴重な歴史資料の保存と利用を推進するため、2005年度より化学遺産委員会を設置し、さまざまな活動を行ってまいりました。「化学遺産認定」は、それら歴史資料の中でも特に貴重なものを認定することにより、文化遺産、産業遺産として次世代に伝え、化学に関する学術と教育の向上及び化学工業の発展に資することを目的とするものです。本年は第3回として、ここに紹介する7件を認定いたしました。

公益社団法人日本化学会 化学遺産委員会
2012年3月

●認定化学遺産 第011号

眞島利行ウルシオール研究関連資料



眞島利行（写真提供：大阪大学総合学術博物館）



眞島研究室ゆかりのウルシオール
(大阪大学総合学術博物館蔵)



オゾン発生装置
(大阪大学総合学術博物館蔵)

表紙の写真

(中央)カイザー・ wilhelm研究所前の田丸節郎(中央左)とハーバー(中央右)
(左上)由良精工のベンゼン精製用蒸留塔と凝縮塔
(左中)眞島研究室ゆかりのウルシオール標本
(左下)眞島研究室ゆかりのウルシオール手描き図面
(右下)鈴木梅太郎ビタミンB1関連資料
(右上)小野田セメントドリッケン窯上部

●認定化学遺産 第012号

田丸節郎資料(写真および書簡類)



田丸節郎(ニューヨークにて)
(田丸家蔵)

田丸節郎(1879~1944)は、1908年にドイツのフリッツ・ハーバーの研究室に留学し、アンモニア合成の研究に参画した。その実績から1912年にKaiser Wilhelm研究所(現Fritz-Haber研究所)の所員に任命された。第一次世界大戦の勃発によりニューヨークの高峰研究所などを経て1917年に帰国、理化学研究所研究員となった。田丸はドイツでの経験を活かして理研第1号館(化学)の設計や学術振興会の創設などに貢献し

た。田丸家に保存されている本資料は、ハーバーや高峰譲吉との交流を示す写真や肖像画で、日本の化学研究の基盤を作ったことを示す貴重な資料である。また田丸は、ラボアジー、リービッヒなど著名な化学者の自筆書簡をヨーロッパで収集した。これは世界の化学史料として重要である。

上：田丸節郎(中央左)とハーバー(中央右)
下左：田丸節郎(左)と高峰譲吉(右)1916年
ニューヨークにて 下右：田丸節郎が収集したラボアジー自筆書簡
(田丸家蔵)



●認定化学遺産 第013号

鈴木梅太郎ビタミンB1発見関係資料



鈴木梅太郎
(写真提供：理化学研究所)

鈴木梅太郎(1874~1943)は、当時不治の病と恐れられた脚気の原因について研究し、米糠の中に微量でも生命活動の維持に必要な物質があることを1910年に発見し「オリザニン」と命名した(現在のビタミンB1)。これは実質的に世界で初めてビタミンの概念を提唱し、ビタミンを発見したことになる。オリザニン標本類、直筆ノート、草稿などビタミンB1発見にまつわる資料で、東京大学大学院農学生命化学研究科、理化学研究所、国立科学博物館に保管されている特に重要な資料を化学遺産に認定する。



鈴木梅太郎研究室で抽出・分離された「米糠の成分」標本
(国立科学博物館蔵)



鈴木研究室で最初に結晶化されたオリザニン(ビタミンB1)
(国立科学博物館蔵)



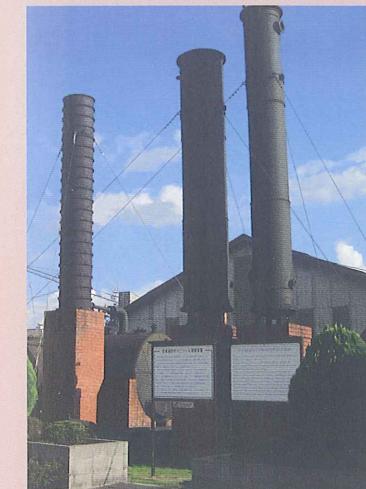
アベリ酸(ビタミンB1)の特許について記述した鈴木の自筆草稿
(理化学研究所蔵)

●認定化学遺産 第014号

日本の合成染料工業発祥に関する

ベンゼン精製装置

第一次世界大戦の勃発によりドイツから合成染料の輸入が途絶したため、1914年11月三井鉱山でのアリザリンレッドの工業化を皮切りに日本の合成染料工業が始まり、2、3年のうちに10社以上が参入した。この発祥期の資料としては、由良浅次郎が創立した由良精工(現在の本州化学工業㈱)和歌山工場に、合成染料の出発原料であるベンゼンの精製装置が保存されているのみである。この装置は1914年に自社で設計され国内で製造された貴重なものである。



ベンゼン精製塔と凝縮塔(本州化学工業㈱蔵)